

三月の例会は有難くすんだ。しかし微熱が出るので二晩ほど夜席を休ませてもらった。

四日五日と寝床の中で休養して、いよいよ六日から佐賀支部の発会式と講演会であるが、その日になっても遂に観念するより外ない。何という情ないことであろう。花田君だけに行ってもらおう。医師のこんこんたる御注意もあり、残念ながら行かぬことにする。誠に待ちに待って下さる御同胞に相すまぬことである。

しかし、私は寝ていても、各地で尊い会座が開かれていることを憶念するとありがたい。山本君は今度はじめての賀茂郡原村に出かけ、それから久地へ飯室へ廻つて来る。大森君は、四日から福山支部、服部村正覚寺正信仏教青年会発会式、それがすむと芸州へ帰つて吉坂支部、私の故郷の原支部へ、十七日頃石州へ帰るとのこと、花岡君は共和支部へ寄つて島根各支部へ一ヶ月間御苦勞である。私は床の中で静かに憶念させて頂く。

八日。智照君が心配して本部に来てくれる。明日からは久米支部、今度は山の中の正覚寺でなく、いよいよ久米の郷で開会されるので、長い間の待望の会座である。小林さん、藤井さん、兼重さん、その外多くの同胞方の張切つた様子が思われる。しかしとても行けそうにない。皆様を失望させて誠に相すまぬことである。念仏しておわび申します。智照さんに聞けば、佐賀へ行つてくれたとのこと、それに正覚寺も七日には佐賀へ行つてくれたとのことと安心した。佐賀も有難かつたことであろう。

十日山本君帰る。各地の有り難かつた様子を聞く。賀茂の原村は、梅谷君率いるところ、附近に、吉川村、西志和村、西条町の同胞あり、あるいは准支部位にはなるかも知れないとのこと。久地は沖本さんが会所で盛会だったとのこと。飯室支部はたつたこの間、二月に正念寺で講演会があり、漸くにして起上つたのである。この度は会所は丸本さんだったとのこと。山本君云く、「先生に死んで貰っちゃいけません。皆が力にしているのですから」と。来る御手紙にも便りにも、一日でも長生きしてくれとある。すでにヒビの入つた体、大切にすればただけの命だと医師はいう。体にヒビが入っていることはすぐ知れるが、心のヒビには気がつかない。ヒビの入つた体をかかえて念仏すると、心のヒビもよくわかる。早く暖くならないかなあ。暖かくて熱さへ出ねば今でも飛んで行きたいに。十一日山本君は御法事で故郷へたつた。

春の聖会に今でも毎日申込みがある。もう四百人を突破したであろう。どんなにしても三百五十人以上は入れられない。泣く思いがするが、事務からことわつて出している。すると廊下の隅でもと言って来られる方がある。すみません。それでも八月の申込みがはじまつたとのこと。「どうか、私の体よ元氣になつてくれ、春の講習には、思う存分話せるように。」と念ぜずにはいられぬ。それにしてもありがたいことである。みんな皆、御念力の賜、御同胞の精進のおかげである。

十年も前から書面で知りつゝ、どうしても会うことの出来ぬ奈良県の〇〇さん、△△子さんから御便が来る。御便によると〇〇さんは病苦をおして、すゝめられるまに、信仰相談所という所に行かれた、四隅に屏風を立てた真暗な内観室というのがあつて、そこに入つて過去を振り返つて、反省するのだそうである、病苦と闘いながら二十日間坐つたのだそうだ、宿善開發せず空しく帰つて来たとのこと。そして、「生死巖頭の自分、風前の燈の様な我が命を思ひますと、どうしたらよいかと苦しみます」と言つてある。この方は不幸な方である。十七願海の具体的事実眼を開くことが出来ないで、唯抽象的な個我を何とかしようとしているのである。病気で出て来られない為、初めの出発が悪くて、自力へ自力へとこぢれて行かれたらしい。悪いくせのつかない初に出て来て講習に入り、素直にすすく伸びて行かれる若人たちは幸である。

罪悪感なら坐つて考えても出来るか知らんが、機の深信は、聞其名号信心歡喜と法を聞くより外には決して生れては来ない。この春四月には無理をしても大阪支部へ出て来て聞きたいとのこと。もし私の体が立直らず大阪にも行けなんだからどうしようかと案じられる。関東大震災に遭つた人の話に、大地がぐらぐらゆれるので、あわてて石の門柱にだきついたり、木にさばつたりして、皆大地を忘れていたとのことである。大地に坐つて倒れた者はいない。ぐらつくものにとりすがつて一緒に倒れるより、大地に坐ることを知らなかつたとのことである。本願の大地、大慈悲の大地に全我を投出した相が合掌念仏である。

十二日から三日間は、須々万支部六字講の会座である。会所の仁谷さんは、去年三月から一年間待つて下さつたのに行くことが出来ない。昨年一昨年のあの潮の寄せて来るような会座を思出すことである。こうして行こうとして行かれない日に、何心なく無事にすぎゆく会座の厳肅さを思うことである。一応は求めなければ得ることは出来ない。しかし求めても得ることは出来ない。みんな人間の小さなはからいら生れることではない。

十三日花田君から本部あてにはがきが来た。「合掌、佐賀支部発会式無事終了。大変盛大に且つ厳肅なる中に、柳田先生、藤井慈光氏を迎えて予想外に有難くありました。西川のおばさんが、発会式に出席して下さいるより御病気の全快して下さいます様にと、病状のみを案じて下さる。共に泣かされます。久米支部又超満員の盛況、木村トモ老、中村タツ老、また木戸トヨ様、温見の藤井一三様、徳山の同胞皆様参集して、「先生は見えざるも先生を背後の光とし力として」との正覚寺様の絶叫一貫し、て、一日一日と熱は加わり、空気は高まり、最後の夜は智照君の、先生を憶念して影なきも心はこの会座にましますと……一同ただすゝりなきの声のみ、大変有難く終了致しました。以上情況報告まで不一」とある。

「皆様誠に相すみません。大変な仕度をさせ喜んで待たせてをいて姿を見せないで、同一念仏に連なる同胞ならこそ、誠に有難く存じます。私が話さないでも決して損はなさらなかつたことと信じます。私は病床にあつてひたすら念じつゞけさせて頂き

ました。何時お別れが来てもいいように、明らかに聞かして頂きましょう」とはがきを見つつ、泣けて来ることである。

同じ日十三日、電報「ケソジシス カワモト」。何ということだ。浪ちゃんは、また子どもに死なれた。たった三日前、生れて百日ほどの子をはじめて本部につれて来たが、顔の色が悪い、それに寝いびきの音が変だ。早く医者に診せるようにと言って帰らしたのに、もう死んだか。満州で栄養失調で子を失ひ、今また男の子だと喜んでいたのに急に死なれて、今は気も狂せんばかりに泣いているであろう。(藤井浪子ほ、昭和九年頃から本部にあつて働いてくれた人である。帰還者の重苦の中に地御前の方で暮している)

誰も彼も、生死の苦海ほとりなく、苦悩の大波小波の中を生きゆく。本願の大船なくしてはこれを超えさせて頂くことはむずかしい。

一つの家庭がもめて暗くなる。誰にも彼にも言い分がある。その異つた言い分を持つていてどうすることも出来ないからもめるのである。一時おさえて見ても治まるものではない。だからと言って言い張れば家庭は破れてしまう。そこで出しきりもせず、収まりもせず、毎日梅雨のような暗いジメジメした空気が続いてゆく。どうすればよいのか。中にはその中の誰かが漬物石になつて、皆をおさえたまで暮してゆく。無理があつて不幸であり、皆がバラバラであることは同一である。甲に対抗する為に乙と丙とが怒りや欲を一つにして当つても、決して乙丙は一つになつたのではない。そうして欲や怒りや追従や盲従や機嫌取りや等々の一切を越えて、人は人と、一つ心になりきることが出来るであろうか。

ある学生はこう言つた。「私は最近御法を聞くようになってから、自分の愚さがわかるようになった。ところが友人に出会つて、彼が言うことを聞いてみると、何とこの男はつまらぬことばかり言っているものだろうと思えてならないようになった」と。世には愚かなる親しさというものがあろう。一方に真実の智慧が成就して見ると、決して一つではなかつたのである。人間が一つになることはむずかしい。

私は二月に二組の結婚式の司婚者をした。結婚した若い男女はこゝに多く問題を受取つたのである。夫婦間を如何にすべか、それは決して解決された問題ではない。愛が深ければ深いほど憎がおこり疑がおこる。しかし人間は夫婦より以上に近づくことは出来ないが故に、夫婦がほんとうに幸福であれば、その人生は幸福であり、夫婦の間が不幸であれば、ほとんど人生は不幸である。二人の長所も欠点も互に一方に影響する。その相互限定を受取つて、傷つけあうかわりに磨かれてゆき、そこに光る智慧によつて照し合ひ、敬と愛とによつて一つとなることが出来たならば、外からどんな嵐が吹いて来ようとも、力強く生きることが出来るであろう。

念仏の人は一つになることが出来る。たとえ長い間いがみ合つた親子でも、いぢけあつた夫婦でも、仲の悪い兄弟でも、御念仏の中に生きさせて頂くことが出来れば、皆恩讐を超えて同一信心に融けさせて頂くことが出来る。融けるといふことは、何時

もいうように私の内なる問題を解決して頂くたつた一つの相である。水は解けて水になる。我慢はとけて無我となり、罪悪煩惱はとけて功德となる。弥陀の満足大悲のはたらきも、円融無碍ととかして下さる一つである。六字の中でとかされて大慈悲の水となる。どんな悪人でも愚者でも「智慧のうしほに一味なり」である。

内に内に、大法を聞いて内に、更に内に、内に一切を転ずる。善悪と言つて外に向かず、頭を下げて内に転じて、更に自己を精算し、自己を精算し、内に問題がなくなつて念仏一つで一切がすむまで、内転すべきである。

「称ふればうらみくやみの雲はれて　むねにはのこる信心の月」。この世には、天地の外にはみ出たものがないように、念仏からはみ出た問題はないことを知るであろう。これを撰取不捨という。たとえ念仏行者の周囲に念仏せぬ我慢な人があろうとも、自己を内観し、弥陀界に願入するものは、無碍の一道にある。そこには悲しさも辛さも、真実のいのりに統一せられてその人に向ふが故に、何時かは、相手の心の扉を開くであろう。かくて、親と子と、夫と妻と、開かれた大信海に遊び、同一念仏無別道故と生きることが出来るに至らば、生きることの歡びこれに過ぐるものなきを知るであろう。他に求めずして、自らまずこの世界に入らして頂くことが第一である。

十三日。昨日石田支部から電報が来たのに返電を打たずにいたため、お昼頃田村邦夫君が来られた。大分元氣が出て、熟も出なくなつたので、突発的なことがない限り明後日は右田支部創立十五周年記念講習会に出席することに腹を定める。田村君には御苦労ではあつたが、短い時間のあいだ、支部の皆様の様子を聞き、御讃嘆することが出来たことは嬉しいことであつた。去年の県連の時が思い出される。定めし今頃は幹部たちは仕度の為に大活動であろう。皆念仏に輝いて。

念仏すれば、各地の同胞が次ぎ次と思われる。病氣することは嫌だけれども、静かに、心のゆとりを頂いて、かえつて同胞の皆様に会わせて頂く。御同胞の護念ほどありがたい世界がまたとあるであろうか。帯紐といつてものが言えるのは同胞方とのみである。「先生！」とあちらからもこちらからも声が病床に聞えて来る。ありがたい御便には毎日泣かされることである。あちらにも讃嘆会、こちらにも讃嘆会。「仏法は讃嘆談合に極まる」との蓮師のみ教の如くありがたいことではある。

善知識のみ教の通りにさせて頂けば、仰せの如くありがたい世界は開いて来るものであることを、いよく明かに知らせて頂くことである。ああ、御同胞、御同胞、南無阿弥陀仏の中に恵まれた御同胞こそ私の尊き善知識である。

十四日。今日も寒く曇っている。晩には、武本先生に引率された津山市の作陽高等學校の生徒が四十余名本部に泊まる。武本先生と御念仏の御讃嘆をさせて頂く。武本先生も会えたとして喜ぶこと喜ぶこと。私に代わつて細川君に一場の御話をして貰う。明日はどうでもこうでも右田支部に行くことにする。